

言葉と想像力は人間の尊厳と生命力の礎であり、その獲得を保証する平和の砦が図書館である

以下、

< (読書) ひもとく 本で「つながる」 > (朝日新聞 16.10.23) からの抜粋

(文中、書名以外の太字は引用者によります。)

全文はこのURL (<http://book.asahi.com/reviews/column/2016102300001.html>) をクリック

今年、『**アウシュヴィッツの図書係**』(アントニオ・G・イトゥルベ著、小原京子訳、集英社・2376円) という翻訳書も出たが、人は極限の状態でも、本を読む。**言葉と想像力は人間の尊厳と生命力の礎**だ—『**戦地の図書館**』は第2次大戦中、米国で発刊された「兵隊文庫」の活動を詳しく伝える。**書物の威力を知っていたからこそナチスは1億冊もの本を焚書ふんしょ・発禁とし、米軍はそれを上回る1億2300万冊余の本をペーパーバックにして戦地に送り続けた。**日本が贅沢せたくを封じていた頃、米国兵は戦地でヘミングウェイやディケンズを読んでいたのかという感慨もさりながら、衝撃的なのは米国の選書方法だ。例えば『They Were Expendable (兵士は使い捨て)』という体験記が真っ先に「必須図書」に選ばれた。日本軍とのフィリピン戦で米兵が捨て駒として消耗される現実を描く作品だ。「自分たちがなんのために戦っているのか知る権利が、兵士にはある」と**軍も検閲に抗して主張**した。

知り考えることで、**意味のない戦いを避け、平和の早い訪れを願う。**こんな考えを現在の米国も世界中の国も持っていたなら、「**聖戦**」という幻のもとに**無数の命と人間性が失われる**こともないだろう。しかもこんな選書は文学に対する信頼がなければできない。文学にふたたび力を、と願わずにもいられない。

< この文書は、「図書館の力」(下記URLをクリック)に掲載されているものです。 >

<http://fileshelf.cocolog-nifty.com/blog/2012/10/post-5a26.html>